

## 二 正宗卿の逝去 伊達兵部少輔の事

正宗卿が柳營の爲に大功のあつたことは一方ならぬ。元來あきらめの善い人であつたから、關ヶ原の戦以來、もう天下は徳川のものであると見抜いたので、宿昔の雄志を棄て、一途に徳川の天下を堅固にするといふことに許り心を用ひた。この事は伊達騒動の事を考へるものゝ知らねばならぬことである。伊達家にあれ程の騒ぎがあつて、而も滅知にもならず、國替へにもならなかつたのは、勿論外にも色々の譯があつた。然し先祖の正宗が潔く快く徳川家の繁昌を助けた功は、徳川家に取つて決して忘るまじき友誼であつたといふことが、柳營の役人の胸になければ、左様に手輕くは行かなかつたらうと思はれる。而るに此正宗は明正天皇の寛永十三年五月二十四日に歿した。辭世の歌に、

曇りなき心の月を先だて、

浮世のやみを照してぞゆく

といふのがある。戒名は貞山利公といつたので仙臺人は貞山公と云つて居る。この卿の子許多ありし中に、長男、侍従兼遠江守秀宗は故ありて家を繼がず、慶長十九年の冬、家康より伊豫國十萬石を與へられて別家した。今の宇和島の伊達家の先祖は此人である。そこで次男、少將忠宗朝臣が家督を繼いだ。仙臺の義山公といふのが此人のことである。これは戒名を大慈院義山仁公大居士と曰つたからである。それから總領の息女に西館殿といふがあつた。これは慶長十一年といふ年に、家康第六の子、越後國頸城郡、高田領六十萬石の國主であつた四位少將上總介忠輝朝臣の内室になつたが、元和二年、忠輝朝臣が柳營より罪を蒙つて朝熊山に入られてより仙

臺へ歸つた。後法體のちほふたいとなつて、天麟院殿てんりんあんと云つたのは此人のことである。この三人の兄弟が正宗の子の中では一番名高い人である。それから末子ぼつしに兵部少輔宗勝ひやうぶせういむねかつといふがあつた。或本には正宗の十男なんとあり、或本には十二男とある。免とに角末子かくには相違ない。此人が後に伊達騒動の張本人と謳うたはれた人である。この人は兄忠宗の取とりなしで、後光明天皇即位の年、即ち正保元年に將軍家に召出めしだされ、紋爵じよしやくして兵部少輔となり、兄の所領一萬石程を分けてもらつて諸侯の列つらなに連り、不斷だん江戸の屋敷に居た。この人は流石さすがに英雄の血を分けたので、随分れいり伶俐な方ほうであつた。然るに其その伶俐れいりなのが禍わざはひをして、とうとう大きな騒動さわごわが始まつた。